

火や熱に関する動詞の意味記述

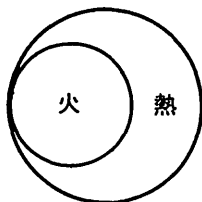
中 本 正 智

類義語の意味分析は一つの意味領域を設定し、その領域内に含まれる語同士を比較することによってなされねばならない。一つの領域内に含まれるそれぞれの語は他の語との関係において独自の意味をになっているものと予想される。それぞれの語の意味記述はこれら同一領域に含まれている他の語との有意味な対立特徴、つまり示差的特徴を記述することにほかならない。示差的特徴は複数の場合があり、そのすべてを記述することである。とはいえ、示差的特徴は無限にひろがるものではない。一つの意味領域に含まれる語は有限であるから、自らその対立特徴である示差的特徴も有限のはずである。

意味領域の設定

意味領域 (semantic field) とは、指示される内容 (referent) の一連のひろがりを用いる。そのひろがり全体は現実界の存在そのものである。これらは語との指示関係を結ばない限り、いまだ言語の意味とみることはできない。言語の意味は現実界と語とが指示関係を結ぶことによって生じるものだからである。その指示関係がどのような示差的特徴によって行なわれているかを明らかにすること、これが意味分析である。

火や熱に関する意味領域はどのように設定できるか。現実界をみると火は常に熱を帯びているので、この両者は重なる場合が多い。しかし、熱は体温や地熱のように必ずしも火を伴うものではない。火は必ず熱と同居しているが、熱は必ずしも火と同居しているわけではない。つまり、図のように火は熱の領域より狭く、抱括される関係にある。



ここでは、熱源である火を中心にして、火と熱が同居している領域に限りたい。

熱源である火をとりまく現実はどうか。火は薪などに代表される燃焼物によって起こされる場合がもっとも普通であろう。歴史を経るにつれ、技術の進歩に合わせて石炭・石油・ガス・電気のように多彩となった。太陽なども自然界の熱源として太古から重要なものである。ここではもっとも一般的な薪などに代表される燃焼物による「火」を中心に考察したい。

火や熱に関する作用や変化はいろいろある。「もやす」のように「火」そのものの様態に関するもの、ご飯を「たく」のように火やその熱の力で対象物を変化させるもの、「きえる」「ひえる」のように火や熱が失われるもの、「つける」「うつる」「おきる」のように火そのものの出現・移動に関するもの、などである。また常に火に伴っている「明り」に関するものもあろう。「見える」のように感覚に訴えるものもあろう。ここで考察する意味領域は、火そのものの様態に関するものと、火やその熱の力で対象物を変化させるものに限ることとする。つまり、動詞のもつ一属性「ある条件下での火や熱そのものの様態、または火や熱を加えて対象物を変化させる様態」を意味領域とすることになる。

このように設定した意味領域は具体的にいくつかの場面からなっている。

- [1] 火(熱)そのものの様態。たとえば火が火になる素材である木と関係するだけで、特に対象物を必要としない。
- [2] 火によって、対象物を変化させる。
- [3] 火によって、鍋釜類を媒介として、対象物を変化させる。
- [4] 火によって、鍋釜類に油を入れたものを介し

て、対象物を変化させる。

- [5] 火によって、鍋釜類に水を入れて熱する。
- [6] 火によって、鍋釜類に水を入れて熱し、その熱で対象物を変化させる。
- [7] 火によって、鍋釜類に、対象である水と物を入れて変化させる。
- [8] 火によって、鍋釜類に水を入れて熱し、蒸気にして、その熱で対象物を変化させる。

以上を図示すれば次のようになる。それぞれの語の記述を〔1〕〔2〕〔3〕…で示す。

〈意味的環境〉

	火熱源	媒介物				被変化物	
		鍋	油	水	蒸気	液体	固体
[1]	+	-	-	-	-	-	-
[2]	+	-	-	-	-	-	+
[3]	+	+	-	-	-	-	+
[4]	+	+	+	-	-	-	+
[5]	+	+	-	-	-	+	-
[6]	+	+	-	+	-	-	+
[7]	+	+	-	-	-	+	+
[8]	+	+	-	+	+	-	+
[9]	-	+	-	-	-	-	+

これらの火や熱に関する場面は現実界の referent の世界で、意味的環境と呼ぶことができよう。これらの場面における作用・変化を cover する動詞は、もやす・たく・あぶる・やく・こがす・いる・あげる・いためる・わかす・ゆでる・ゆがく・にる・せんじる・ふかす・むす・むらす、などである。

構文論的特徴および対象語の範囲

火や熱に関する動詞は、

- a. 何を どのように火や熱によって 変化 (作用・現象) させる。
- b. 何が どのように火や熱によって 変化 (作用・現象) する。

のように、他動詞と自動詞の両構文をもつ。「やく」ならば、前記の意味的環境〔2〕によって「餅をやく」と「餅がやける」の対がある。これらの対をあげよう。

- もやす 〔1〕 a. 火をもやす。
b. 火がもえる。
- たく 〔1〕 a. 落葉をたく。

- b. ×
- たく 〔7〕 a. ご飯をたく。
b. ご飯がたける。
- あぶる 〔1〕 a. 手をあぶる。
b. ×
- やく 〔2〕 a. 餅をやく。
b. 餅がやける。
- やく 〔3〕 a. 肉をやく。
b. 肉がやける。
- こがす 〔3〕 a. 肉をこがす。
b. 肉がこげる。
- いる 〔3〕 a. 豆をいる。
b. 豆がいれる。
- あげる 〔4〕 a. 天ぶらをあげる。
b. 天ぶらがあがる。
- いためる 〔4〕 a. 野菜をいためる。
b. ×
- わかす 〔5〕 a. 湯をわかす。
b. 湯がわく。
- ゆでる 〔6〕 a. 卵をゆでる。
b. 卵がゆだる。
- ゆがく 〔6〕 a. 牛蒡をゆがく。
b. ×
- にる 〔7〕 a. 豆をにる。
b. 豆がにえる。
- せんじる 〔7〕 a. 薬をせんじる。
b. ×
- ふかす 〔8〕 a. 芋をふかす。
b. 芋がふける。
- むす 〔8〕 a. 茶わんむしをむす。
b. ×
- むらす 〔9〕 a. ご飯をむらす。
b. ご飯がむれる。

この例からわかるように、「たく〔1〕・あぶる・いためる・ゆがく・せんじる・むす」は他動詞だけがあって、自動詞をもたない。これらの語の自動詞的な表現のためには、その受身形が用いられる。たとえば「大根をゆがく」に対して「大根がゆがかれる」のように。「を」格および「が」格に立つ対象語および主語を検討しよう。火と関係する状況を細かく観察すると、

- 〔I〕 火と関わる前の様態
木・水・米などの語
- 〔II〕 火そのものの様態
火・煙・熱などの語
- 〔III〕 火と関わった後の様態

ご飯・お茶・灰などの語

「やく」は「魚をやく」のように火と関わる前の「生魚」を対象語にとっているとみられるから、「やく」の対象語は〔Ⅰ〕に属する。

「もやす」ならば、火と関わる以前の「木」を対象語にとって「木をもやす」とも、火そのものを対象語にとって「火をもやす」ともいう。火と関わったあとの「灰」などを対象語にとることはできない。つまり、「もやす」の対象語は〔Ⅰ・Ⅱ〕にひろがっている。

「たく」は「落葉をたく」「煙をたいて蚊を追ひ払う」「ご飯をたく」というから、その対象語は〔Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〕にひろがっている。

「にる」は「芋をにる」「お汁をにる」というから、その対象語は〔Ⅰ・Ⅲ〕にひろがっている。

「わかす」は「湯をわかす」というから、その対象語は〔Ⅲ〕に属する。

以上から、対象語のひろがり動詞によって異なり〔Ⅰ〕〔Ⅰ・Ⅱ〕〔Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〕〔Ⅰ・Ⅲ〕〔Ⅲ〕のいずれかを示す。

対象物の様態について、大きく固体・液体・気体が関係し、その大・小の差、全体と部分の関係、食物であるかどうかの目的による差などが問題となる。

火そのものの様態については、火の勢いの大小、火に伴う煙や熱の多少などが問題となる。

火と関わった後の様態については、固体・液体・気体、臭気・変質・色などが問題となり、「もやす」のように後にもとの形が残らなくなるかどうかという存在のあり方も問題となる。

アスペクトによる特徴

火そのもの、および対象物との関わり方を時間の流れの中でみたとき、将然態・はじまり・進行態・おわり・完了態のいずれを表わしているかが問題となる。

「もえる」ならば、

火がもえようとしている。(将然態)

火がもえはじめる。(はじまり)

火がもえだした。(〃)

火がもえている。(進行態)

火がもえつきる。(おわり)

火がもえきる。(〃)

火がもえおわる。(〃)

火がもえた。(完了態)

火がもえてしまった。(〃)

となる。「もえている」が進行態を表わしているのだから、「もえる」は継続動詞に属する。「もえはじめる」は

燃焼がはじまることを表わしている。これに対して「もえだす」は火種などを含んで燃焼の潜在的な可能性をはらんだ状態がある期間続き、突然、火の勢が表面に現われはじめることを表わす。補助動詞「～だす」は「もえる」現象がはじまる状況を表現している。「ご飯がたけだす」は、ある期間「たく」状態を続けたのだがなかなか「たけず」、そうするうちに、急に「たける」徴候がみえはじめることを表わす。「お肉がじゅうじゅうやけどだす」「お湯がにたちだしたらそうめんを入れる」などの「やけどだす」「にたちだす」も同じ表現である。

「もえつきる」は燃焼の終了を表わし、「もえきる」は燃焼の極限を表わしている。同じ「おわり」の部分も微妙な差を示している。

「もやす」

(1) 火をもやす。

「もやす」は火そのものの様態を表わす動詞である。燃焼の現象が起こることが重要な特徴で、燃焼の場所や方法は示差的特徴ではない。また生じた火や熱で何かの対象物を変化させるかどうかとも示差的特徴ではない。

(2) 浜辺で火をもやす。

(3) マッチで 火を もやす。

(4) 火をもやして 体をあたためる。

「浜辺」「マッチ」「体をあたためる」は「火をもやす」ことにとってなくてはならない特徴ではない。

(5) 火をけす。

「もやす」と「けす」は反義関係にあるが、火そのものの様態、たとえば、炎が確認できるかできないかということが反義関係をもたらず特徴である。したがって、「もやす」の中心的意味は「炎および炭火のような現象を起こす」ことである。これは火・熱そのものが問題となるだけであるから、意味的環境は〔1〕である。

「火のないところに煙は立たない」と言われるように、「もやす」とき、常に煙・赤い炎・熱が同居しているのが普通である。そのため比喩的な表現として、

(6) 向学心に もえる。

(7) もえるような色。

などが生じている。「向学心にもえる」は、熱が比喩的にひろがったものであり、「もえるような色」は、炎の赤色が比喩的にひろがったものである。

「もやす」の「を」格にくる語を検討してみよう。「火をもやす」の対象語は火そのものの様態〔Ⅱ〕に

属するものであるが、

(8) 薪を もやす。

の対象語は、火と関わる前の様態〔I〕に属するものである。「もやす」の「を」格の語は〔I・II〕の両方にまたがっていることである。

「もやす」の対象物は、

(9) 木を もやす。

(10) 灯油を もやす。

(11) ガスを もやす。

のように、固体・液体・気体のいずれでもよく、燃焼する性質を有するものであればよい。火と関わった後の対象物の様態は、その本来の形や質を失っているのが普通である。

(12) 古い手紙を もやした。

この例では、「焼失」の意が強調されているであろう。

(13) ランプを もやす。

灯火の場合は普通「ともす」であろう。「もやす」となると、まるでランプ全体をもやしてしまうような意味となる。このことから「もやす」は対象物全体に関わる燃焼を表わしているとみられる。

「もやす」のアスペクトは、

(将然態) もやそうとしている。

(はじまり) もやしはじめる。

(") *もやしだす。

(進行態) もやしている。

(おわり) もやしおわる。

(") もやした。

(完了態) もやしてしまった。

のように表現される。他動詞の「もやす」は動作を表わし、「もやしている」は動作の進行態を表わしている。自動詞の「もえる」は現象を表わし、「もえている」は燃焼という現象の進行態を表わしている。「もやす」も「もえる」も継続動詞である。

「もす」

この語は多くの点で「もやす」に近い動詞である。

(14) 火を もす。

のように、火そのものを対象語にとる。「もやす」より口語的なニュアンスで用いられるようだ。

(15) ローソクを もやす。

(16) ローソクを もす。

部屋を明るくするためにローソクに点火することを「もやす」という。ただし、「ともす」よりは不自然である。「ともす」はコントロールされた灯火に点火することである。「もやす」は対象物全体に火が及ぶこ

とである。不自然さはそこからきている。「もす」は「もやす」よりこの特徴が強調される。「ローソクをもす」となると芯に火をともすのではなく、不要となったローソクをごみの如くに焼却することである。

(17) ごみを もやす。

(18) ごみを もす。

「もす」は「もやす」より火の勢が弱く、「くすぶる」の状態に近いようである。したがって気化して燃えやすい「灯油・メチルアルコール」等を対象語にとりにくい。

「もす」の対象語は、「ごみ」など火と関わる前の様態を表わす語、「火」など火そのものの様態を表わす語である。これらは〔I〕〔II〕に属する語である。

〔I〕の対象物は固体であれば「もやす」と同様に用いられるが気化して燃焼しやすいものは対象語にとりにくい。火と関わった後はもとの形や質を失っている。

「もす」のアスペクトは、

(将然態) もそうとしている。

(はじまり) もしはじめる。

(") もしだす。

(進行態) もしている。

(おわり) もしおわる。

(完了態) もした。

(") もしてしまった。

「もす」は他動詞で燃焼の動作を表わし、「もしている」が進行態であるから、継続動詞である。

「くすべる」

他動詞「くすべる」に対して自動詞「くすぶる」がある。同類のもの「ふすべる」「ふすぶる」もある。これらのうち「くすぶる」だけが一般に使われている。

(19) 薪が もえずに くすぶっている。

(20) 煙が くすぶっている。

「くすぶる」の主体は、火と関わる前の様態を表わす「薪」、火そのものの様態を表わす「煙」である。これは〔I・II〕の範囲である。燃焼の様態は炎が赤々と勢よくもえあがっているのではない。炎はむしろ表面に表われていない。だからといって、もえつきたようなエネルギーのない弱まった状態ではない。燃焼する力を内に秘めながら何らかの理由で燃焼がうまくいかず、炎の勢が表面に出ないのである。いわば火が抑圧されている状態である。したがって常に「煙」を伴うことになり、炎より煙が重要な特徴としてうかがいがっている。ただし、煙も「もくもくと」して勢よく出ているのではない。

(21) 天井が くすぶっている。

火そのものは台所のかまどなどにあつて、その煙の煤で天井が黒くなっている状態だ。火そのものが天井にあるわけではない。「天井」のように煙の煤などが附着しているものを主体とすることもできる。「くすむ」という語があるが、おそらくこの語と関係があるだろう。煙によって色がさえなくなることを表わしている。

「くすぶる」のアスペクトは、

- (将然態) くすぶるところだ。
- (はじまり) くすぶりはじめる。
- (〃) くすぶりだす。
- (進行態) くすぶっている。
- (おわり) *くすぶりつきる。
- (〃) *くすぶりきる。
- (〃) くすぶりおわる。
- (完了態) くすぶった。
- (〃) *くすぶってしまった。

である。

「薪がくすぶっている」は進行態であるが、「天井がくすぶっている」は、天井がくすんでいる状態を表わしているので完了態である。

「くすぶる」は次のように比喩的用法をもつ。

- (22) 一日中 家で くすぶっている。
- (23) この問題は 昨年から くすぶっている。
- (24) いつまでも 役職につけず くすぶっている。

これらは何らかの理由で行動・問題解決・昇格などが抑圧されている状態にある。「くすぶる」のもつ抑圧された状態という特徴が比喩的にひろがったものである。

「いぶす」

この語は火をもやして煙を出している様態を表わしているので、意味的環境は〔I〕である。

- (25) 薪を いぶしている。
- (26) みかんの皮を いぶして 煙を出す。
- (27) サンマを いぶしている。
- (28) 蚊取線香を いぶす。

「いぶす」の重要な特徴は煙を出させることである。これらの対象物は火そのものによって煙を出しているものであるから、〔I〕に属する。

「いぶす」は、火そのものの様態を表わす「火・煙」などを対象語にとることはできない。

「いぶす」は火をもやして煙を出している様態に、さらに煙の影響を及ぼす対象をもつことがある。つまり、意味的環境が〔2〕である。

(29) 蚊を いぶす。

(30) 蚊が入らないように 部屋を いぶす。

(31) たぬきを いぶし出す。

これらの例は、〔2〕の環境で煙の影響を及ぼす「蚊・部屋・たぬき」などを対象語としている。

(32) 鏝節を いぶす。

鏝節をいぶして作るとき、「鏝節」という語を対象語としてとることができるようだ。これは対象語が〔III〕に属している。

比喩的な用法もある。金属に硫黄のすすで曇りをかけて「いぶし銀」を作ることがあったり、煙で苦しい状況に置くことから「いじめる」意味を表わすことがある。ただし、口語では「いじめる」意味として「いびる」を用いる。「いびる」は「いぶる」が他動詞的に用いられて派生したものであろう。

「いぶす」のアスペクトは、

- (将然態) いぶそうとしている。
- (はじまり) いぶしはじめる。
- (〃) いぶしだす。
- (進行態) いぶしている。
- (おわり) いぶしおわる。
- (完了態) いぶした。
- (完了態) いぶしてしまった。

「いぶす」は「いぶしている」が進行態を表わし、継続動詞に属する。

「煙」の様態を表現する動詞として「けむる」「くゆる」があるが、ここでは火を中心にしているので省く。

「たく」

- (33) 落葉を たく。
- (34) 薪を たく。

「たく」は火になる素材である落葉や薪を対象として火を起こすことに主点があつて、その火や熱を何かの目的に使うことではない。したがって意味的環境は〔1〕である。

(35) 蚊取線香を たく。

蚊を払うため、蚊取線香に火をつけて煙を出しているのである。煙が重要であることは、ちょうど「いぶす」に似ている。これも意味的環境は〔1〕である。

(36) 香を たく。

煙より「香り」が重要な特徴で、意味的環境は〔1〕である。

(37) 風呂を たく。

火をもやして風呂をこしらえることである。火のほかには風呂釜を介して火をあたためるから、意味的環境は

〔5〕である。

(38) ご飯を たく。

火や熱は媒介物である鍋釜類によって被変化物である水や米に作用して「ご飯」をつくる。意味的環境は〔7〕である。

(39) 塩を たく。

対象物である潮を煮つめて「塩」をつくることである。

このように「たく」は複数の意味的環境〔1〕〔5〕〔7〕で用いられる点に特色がある。

「たく」は火・熱源と被変化物とが分明でない。「薪をたく」の「薪」は火・熱源の素材であり、「ご飯をたく」の「ご飯」は被変化物である。したがって、

(40) *火に薪を たく。

(41) *火にご飯を たく。

のように、火・熱源と被変化物を明確に分ける構文では「たく」を用いることができない。

「たく」の対象語は、

(42) 日本人は 米を たいて 主食にしている。のように、火と関わる前の様態〔I〕に属する「米」であることがある。「落葉をたく」「薪をたく」における「落葉」「薪」も同類である。前記の「ご飯をたく」における「ご飯」は火と関わった後の様態〔III〕に属する語である。「風呂をたく」における「風呂」も同類である。

「たく」の対象語のうち、〔1〕の環境で用いられるものは「薪をたく」における「薪」のように火と関わった後は本来の対象語の形や質は何も残らないのが原則である。ただし、〔5〕〔7〕の環境では所期の目的によって出来あがったものが後に残っているのが普通である。

「たく」の対象物は「ご飯」「塩」など食物であることもあるが、「風呂」のように食物とは限らない。また「ご飯」のように固体であっても、「お粥」のように「液体」であっても「たく」という。ちなみに「お粥」は「にる」ともいって、中間的な語に属する。

「たく」「たける」のアスペクトは、

(将然態) たこうとしている。 たけるところだ。

(はじまり) たきはじめる。 たけはじめる。

(〃) たきだす。 たけだす。

・進行態) たいている。(完了態) たけている。

(おわり) たきおわる。 たけおわる。

(完了態) たいた。 たけた。

(〃) たいてしまった。 たけてしまった。

である。他動詞の「たく」は〔1〕〔5〕〔7〕のいずれの環境でも動作を表わし、「たいている」が、それ

ぞれの動作の進行態を表現しているから、継続動詞である。自動詞の「たける」は現象を表わしているが、「たけている」はその現象が進行しているのではなく、完了していることを表わしている。したがって「たける」は瞬間動詞である。

比喩的な用法は、

(43) 人を たきつける。

のように、他人をあおり、扇動する意味で用いられる。

「あぶる」

(44) 火に するめを あぶる。

火に対象物である「するめ」を近づけ、その熱で変化させることである。意味的環境は〔2〕である。熱源である「火」と対象物である「するめ」とは厳然と区別されている。したがって、「火に」「するめを」という関係が明確に存在する。「薪をたく」では、対象物の「薪」がそのまま「火」の素材であってその間を明確に区分することができない。だから、「火に薪をたく」「火にご飯をたく」はすでに述べたように用いることができない。「あぶる」は「～に～を あぶる」という構文を用いる。略して「火にあぶる」「するめをあぶる」のいずれでもよい。

「あぶる」の対象物は「するめ」「衣類」「手」などであって、熱を加えることによって水分をへらしたり、やわらかくしたり、あたためたりするなど、明確な目的をもっている。対象語として被変化物だけをとる。火そのもの、および火の素材となるものは対象語をとらない。

「あぶる」は他動詞で、対応する自動詞をもたない。

「あぶる」のアスペクトは、

(将然態) あぶろうとしている。

(はじまり) あぶりはじめる。

(〃) あぶりだす。

(進行態) あぶっている。

(おわり) あぶりおわる。

(完了態) あぶった。

(〃) あぶってしまった。

「あぶる」は、「あぶっている」が進行態を表わし、継続動詞である。

「いる」

(45) 豆を いる。

(46) ごまを いる。

「火」で媒介物である鍋釜類を通して対象物である「豆」「ごま」を変化させることである。意味的環境

は〔3〕である。対象物は比較的小粒のものである。小粒であるから熱は満遍なく対象物に加えられることにもなる。その結果、対象物の様態は水分がへり、焦げたようになる。

(47) 豆腐を いる。

湯豆腐などは四角の大きな固まりであるが、「豆腐をいる」となると小粒にこわし、水分を少なくするのである。「豆腐をやく」ときは全体をそのまま保って表面がごげのように熱を加えたものであり、形を小粒にくずす必要はないのである。

「いる」の対象物は「豆」「ごま」「豆腐」などであるが、これは火と関わる前の様態〔I〕に属するものである。対象語には被変化物だけをとる。

「いる」「いれる」のアスペクトは、

(将然態) いろいろとしている。 いれるところだ。

(はじまり) いろいはじめる。 いれはじめる。

(〃) いろいだす。 いれだす。

(進行態) いている。 (完了態) いれている。

(おわり) いろいおわる。 いれおわる。

(完了態) いった。 いれた。

(〃) いてしまった。 いてしまった。

他動詞の「いる」は、「いている」が動作の進行態を表わしているが、自動詞の「いれる」は、「いれている」が現象の完了態を表わしている。したがって、「いる」は継続動詞であり、「いれる」は瞬間動詞である。

「やく」

48 餅を やく。

火に直接、対象物をあてて「やく」ことができるから、意味的環境は〔2〕である。もちろん金網に対象物をのせることはあっても、直接、火にあてていることにかわりはない。

(49) 肉を やく。

直接、火に肉をあてることがあり、意味的環境は〔2〕である。さらにフライパン等を媒介物として熱を加えて「やく」ことがあり、この場合の意味的環境は〔3〕である。肉からしみ出した油がほどよく「やく」状況をつくってくれる。油が足りないとき、それを加えることがあるから、意味的環境が〔4〕のこともある。

(50) 壺を やく。

のように、対象物は必ずしも食物とは限らない。「餅・肉・壺」などでは「やいた」結果、残ったものが重要である。

(51) 家を やく。

家全体に火がついて、もえつきて本来の形をなくして

しまうことである。焼失の意である。

対象物は被変化物でなければならない。「火をやく」のような表現はない。その被変化物は火と関わる前の様態〔I〕に属する「餅・肉」であることもあるが、

(52) 鯛焼を やく。

(53) 卵焼を やく。

のように、火と関わった後の様態〔III〕に属する「鯛焼」「卵焼」のこともある。

対象物は固体に限られる。熱は表面から内部へと向かい、全体を変質させてしまう。そのため表面の色はこげたようになり、水分は減る。

比喩的な用法もある。

(54) 肌を やく。

熱源は火ではなく、太陽である。強い日による表面の変色が重要な特徴としてとらえられている。

(55) 写真を やく。

光を原版にあてて像を浮かびあがらせるようにすることである。

(56) 薬品で 紙を やく。

熱源はないが、薬品で対象物を変色・変質させる特徴が生かされている。

(57) あれこれ 手を やく。

この「手」は「方法」の意味で、「方法をつくす」ことであろう。「やく」の「焼失する」の意味が生かされて比喩的に使われたのでであろう。「世話がやける」のように自動詞の表現も多用される。

(58) 身を やく。

(59) 人のことを やいている。

心があれこれ思い乱れることや人の吉事をねたむ意味にひろがっている。心の内面をあれこれ思って熱くすることであろう。

(60) 胸が やける。

自動詞の用法が普通であるが、胸が熱くなったように感じるであろう。

「やく」「やける」のように他動詞と自動詞の区別があるが、アスペクトは、

(将然態) やこうとしている。やけようとしている。

(はじまり) やきはじめる。 やけはじめる。

(〃) やきだす。 やけだす。

(進行態) やいている。 (完了態) やけている。

(おわり) やきおわる。 やけおわる。

(完了態) やいた。 やけた。

(〃) やいてしまった。 やけてしまった。

「やきだす」が火をあてはじめるところを表現しているに対し、「やけだす」は、かなりの時間、火があて

られてからこげ色などがつきはじめるころのことを表現している。「やきだす」が動作のはじまりを表わし、「やけだす」が現象のはじまりを表わしているからである。

「やいている」が動作の進行態を表わし、「やけている」が現象の完了態を表わしている。したがって「やく」は継続動詞、「やける」は現象の変化を表わす瞬間動詞である。

「こがす」

(61) 畳を こがす。

(62) こたつぶとんを こがす。

火の熱で対象物である「畳」や「こたつぶとん」を黒く変色させることである。熱によって対象物が変質し、黒や茶色に変わることを表わす。意味的環境は〔1〕である。

(63) 鍋を こがす。

過度の熱のため、煮物などの鍋の内容物まで黒色に変質させることを表わす。意味的環境は〔3〕である。媒介物である「鍋」そのものも被変化物とみれば〔2〕となる。

(64) 肌を こがす。

過度の日光浴で肌を真黒にやくことである。「やく」よりも強く、何よりも色が重要な特徴である。

(65) 火が強くて 魚を こがす。

強度の火によって魚の表面が真黒になることである。魚の内部に熱が通らないうちに表面が変色してしまうこともある。したがって、「こがす」は表面的・部分的な現象であってもよい。内部や全体は重要な特徴ではない。

(66) ご飯を こがす。

ご飯の「おこげ」をつくることである。「おこげ」は鍋底にできるのであるが、見方によってはご飯全体の表面とみることができよう。

「こがす」の対象物は被変化物でなければならない。特に固体に限られる。「畳」のように火と関わる前の様態〔I〕の語もあるが、「ご飯」のように火と関わった後の様態〔III〕の語もある。

「こがす」「こげる」のアスペクトは、

(将然態) こがそうとする。 こげるところだ。

(はじまり) こがしはじめる。 こげはじめる。

(") *こがしだす。 こげだす。

(進行態) こがしている。(進行態) こげている。

(おわり) こがしおわる。 こげおわる。

(完了態) こがした。 こげた。

(完了態) こがしてしまった。 こげてしまった。である。「こがす」は、「こがしている」が動作の進行態であるから、継続動詞である。「こげる」は、「こげている」が、

(67) 鍋が こげているから 早く 火を 消しなさい。

のように、進行態であることもあり、

(68) この ご飯は こげている。

のように、完了態であることもあるから、継続動詞および瞬間動詞である。

比喩的な用法として、

(69) 思いを こがす。

のように精神面の悩みを表わしている。もっぱら精神面だけを表わす「こがれる」のような動詞を派生している。

「あげる」

(70) 天ぶらを あげる。

対象物である天ぶらに鍋と油を媒介して強度の熱を加えることであるから、意味的環境は〔4〕である。

対象語は天ぶらのように火と関わった後の様態〔III〕の語である。

「あげる」「あがる」のアスペクトは、

(将然態) あげようとする。 あがるところだ。

(はじまり) あげはじめる。 あがりはじめる。

(") あげだす。 あがりだす。

(進行態) あげている。(完了態) あがっている。

(おわり) あげおわる。 あがりおわる。

(完了態) あげた。 あがった。

(") あげてしまった。 あがってしまった。

である。「あげる」は「あがっている」が動作の進行態を表わしているので継続動詞であり、「あがる」は「あがっている」が現象の完了態を表わしているから、瞬間動詞である。

「いためる」

(71) 野菜を いためる。

対象物である野菜に鍋と少量の油を媒介して熱を加えて柔らかく変質させることである。意味的環境は〔4〕である。「あげる」が多量の油であるに対して、少量である点に特徴がある。

対象語に、火と関わる前の様態〔I〕に属する「野菜」をとることもあるが、

(72) チャーハン(焼めし)を いためる。

のように、火と関わった後の様態〔III〕に属する語を

とることもある。

「いためる」の aspekto は、

- (将然態) いためようとする。
(はじまり) いためはじめる。
(〃) いためだす。
(進行態) いためている。
(おわり) いためおわる。
(完了態) いためた。
(〃) いためてしまった。

である。「いためる」は、「いためている」が動作の進行態であるから、継続動詞である。

「わかす」

- (73) 天水を わかす。
(74) 井戸水を わかす。
(75) 湯を わかす。
(76) 風呂を わかす。

対象物である水に、鍋釜類を媒介して熱を加え、「湯」にすることである。熱を加えることによって対象物が上下運動等、何らかの動きをすることが重要な特徴である。意味的環境は〔5〕である。

- (77) お茶を わかす。

この例は、「5」でできた「熱湯」をさらに茶に注いで「お茶」をつくることであるから、〔5〕から派生した表現であろう。

対象語として「天水」「井戸水」など〔I〕に属する語をとることもあり、「湯」「お茶」など〔III〕に属する語をとることもある。

「わかす」「わく」の aspekto は、

- (将然態) わかそうとする。 わくところだ。
(はじまり) わかしはじめる。 わきはじめる。
(〃) わかしだす。 わきだす。
(進行態) わかしている。(進行態) わいている。
(おわり) わかしおわる。 わきおわる。
(完了態) わかした。 わいた。
(〃) わかしてしまった。 わいてしまった。

である。「わかしている」は進行態で、沸騰点に達していなくてもよい。「わかす」は継続動詞である。「わいている」はお湯が沸騰点に達して上下運動をくり返していることを表わす。「わいている」は、沸騰点に達する点に着目すれば完了態であるが、沸騰することに着目すれば、進行態を表わしている。したがって、「わく」は継続動詞にも、瞬間動詞にもなる。

比喩的な用法として、

- (78) 観衆を わかす。

というのがある。これは対象物が何らかの動きを示すという「わかす」の特徴が観衆の熱狂の意味に比喩的に用いられたものであろう。

- (79) うじを わかす。

火や熱とは関係のないことであるが、対象物の動きという「わかす」の特徴が、「うじの発生」の意味に用いられるようになったのであろう。

「にる」

- (80) 芋を にる。
(81) 豆を にる。
(82) 魚を にる。

対象物に、鍋と水少量を媒介して熱を加え、内部まで変質させることである。「芋」などは内部まで柔らかくなってはじめて「にえた」ことになるのである。内部まで熱を及ぼすという特徴から、「味付け」等の特徴も付随的に生じたものと考えられる。内部を変質させるためには長時間を要する。意味的環境は〔6〕である。

- (83) 味噌汁を にる。

味噌汁は被変化物として液体と固体を含んでいるから、意味的環境は〔7〕である。

- (84) 糊を にる。

- (85) まゆを にる。

対象物は食物とは限らない。

対象語は、固体でも液体でもよく、「芋」のように〔I〕に属する語でも、「味噌汁」のように〔III〕に属する語でもよい。

「にる」「にえる」の aspekto は、

- (将然態) によようとする。 にえるところだ。
(はじまり) にはじめる。 にえはじめる。
(〃) にだす。 にえだす。
(進行態) にている。(完了態) にえている。
(おわり) におわる。 にえおわる。
(完了態) に た。 にえた。
(〃) にてしまった。 にえてしまった。

である。「にる」は「にている」が動作の進行態であるから継続動詞、「にえる」は「にえている」が完了態であるから瞬間動詞である。

「せんじる」

- (86) 漢方薬を せんじる。

対象物に鍋を媒介して熱を加え、薬の成分を熱湯にしみ出させる。水分は対象物の一部と見られる。長時間を要する。意味的環境は〔7〕である。

対象語は〔Ⅰ〕〔Ⅲ〕に属する語をとる。

「せんじる」のアスペクトは、

- (将然態) せんじようとする。
(はじまり) せんじはじめる。
(〃) せんじだす。
(進行態) せんじている。
(おわり) せんじおわる。
(完了態) せんじた。
(〃) せんじてしまった。

「せんじる」は、「せんじている」が進行態であるから、継続動詞である。

「ゆでる」

- (87) 牛蒡を ゆでる。
(88) えびを ゆでる。

対象物に、鍋と多量の水を媒介して熱を加えて変質させる。熱湯は熱を伝えるためだけのもので、役目がすみしだい、こぼしてしまう。対象物は固体だけに限られる。意味的環境は〔6〕である。

対象語は〔Ⅰ〕に属する語をとるが、

- (89) ゆで卵を ゆでる。

と言えなくもないから、〔Ⅲ〕に属する語をとることもある。

「ゆでる」「ゆだる」のアスペクトは、

- (将然態) ゆでようとする。 ゆだるところだ。
(はじまり) ゆではじめる。 ゆだりはじめる。
(〃) ゆでだす。 ゆだりだす。
(進行態) ゆでている。(完了態)ゆだっている。
(おわり) ゆでおわる。 ゆだりおわる。
(完了態) ゆでた。 ゆだった。
(〃) ゆでてしまった。 ゆだってしまった。

「ゆでている」は進行態、「ゆだっている」は完了態であるから、「ゆでる」は継続動詞、「ゆだる」は瞬間動詞である。

「ふかす」

- (90) 芋を ふかす。

(91) 赤飯を ふかす。

対象物に鍋と湯・蒸気を媒介して熱を加え変質させる。熱を内部まで通すことが重要である。本来は蒸気の状態を表わしていたのであろう。意味的環境は〔8〕である。

対象語は〔Ⅰ〕〔Ⅲ〕に属する語である。

「ふかす」は、「ふかしている」が進行態であるから、継続動詞である。

「むす」

- (92) 茶碗むしを むす。
(93) まんじゅうを むす。

蒸気の熱で対象物を変質させることである。意味的環境は〔8〕である。

対象語は〔Ⅰ〕〔Ⅲ〕に属する語である。

「むす」は「むしている」が進行態で、継続動詞である。

「むらす」

- (94) ご飯を むらす。

火を消して内部の余熱で成熟させることを表わす。意味的環境は〔9〕である。

対象語は〔Ⅰ〕〔Ⅲ〕に属する語である。

「むらす」は、「むらしている」が進行態で、継続動詞である。

昭和48年5月の都立大方言学会で「動詞語彙の意味記述——その方法と問題点——」の題の下で、「火熱動詞」の記述を試みたが、本稿はこれを基礎に東京語の記述を試みたものである。各動詞の弁別の意味特徴の比較を図示するつもりであったが、時間の制約から実現できなかった。大方のご批判を仰いで後日に期したい。

参 考 文 献 一 覧

ここに掲げる参考文献は、本書の意味論関係の論文において各自が参照・引用したものを一括して、文献の著者の五十音順に並べたものである。著書・論文の内容により、ほとんどの者が参照しているものもあれば、ただ一人だけが参照しているものもある。このようにまとめたのはあくまでも便宜的手段であって、御理解・御寛恕願いたい。

- 奥津敬一郎1967「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応」『国語学 70』
- 木川 行央1978「「あてる・あたる」と「ぶつける・ぶつかる」」『日本語研究 第1号』
- 〃 1979「動詞の意味分析——〈接触〉を中心とする動詞語彙の構造——」『都立大学方言学会会報 第87号』
- 金澤庄三郎編1958『新版 広辞林』三省堂
- 金田一京助他編1974『新明解国語辞典 第二版』三省堂
- 池田弥三郎1978『学研国語大辞典』学習研究社
- 金田一春彦
- 国広 哲弥1967『構造的意味論』三省堂
- 〃 1970『意味の諸相』三省堂
- 国立国語研究所1964『分類語彙表』秀英出版
- 〃 1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 志田 義秀
佐伯 常彦編1909『日本類語大辞典』講談社
- 柴田 武1963「方言の見方・考え方」『覆刻／文化庁国語シリーズⅣ 標準語と方言』（教育出版）所収
- 柴田 武編1976「ことばの意味 辞書に書いてないこと」平凡社
- 〃 1979「ことばの意味2 辞書に書いてないこと」平凡社
- 上代語辞典編修委員会編1967『時代別国語大辞典 上代篇』三省堂
- 新村 出1976『広辞苑 第二版補訂版』岩波書店
- 鈴木 孝夫1973「ことばと文化」岩波書店
- 時枝 誠記
吉田 誠一1973『角川国語中辞典』角川書店
- 徳川 宗賢
宮島 達夫1972『類義語辞典』東京堂出版
- 中本 正智1973「動詞語彙の意味記述——その方法と問題点——」『都立大学方言学会会報第53号』
- 〃 1980『日本語の表現と構造』エポナ出版
- 西尾実他編1973『岩波国語辞典 第二版』岩波書店
- 〃 1979『岩波国語辞典 第三版』岩波書店
- 中本 ゼミ1978『日本語研究 第1号』東京都立大学国語学研究室
- 日本語研究会1979『日本語研究 第2号』東京都立大学国語学研究室
- 日本大辞典刊行会1972—76『日本国語大辞典』小学館
- 服部 四郎1968『英語基礎語彙の研究』三省堂
- 平澤 洋一1980「小千谷方言加熱冷却語彙の構造」『國學院大學紀要 第17巻』
- 文化 庁1971『外国人のための基本語用例辞典 第二版』大蔵省印刷局
- 森田 良行1977『基礎日本語』角川書店